

# トランスジェンダー をいきる (10)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

## 「男読み読書術」の変容（2）三浦綾子『塩狩峠』を読む

### 1 始めに

前回から、読書が嫌いだった私が、どのようにして読書を楽しみ、現在の研究活動にまで活かすことができるようになったのか、「男読み」という概念を生み出し、読書術を構築してきたプロセスについて詳述している。今回は、三浦綾子の長編小説『塩狩峠』を「男読み」しながら、自己の男性性と暴力性について記述する。

『塩狩峠』を読んだきっかけは、中学校 2 年生の夏休み、担任の女性教師に勧められたことであった。

この本は、実在した長野政雄の自伝を小説化した内容である。ざっと要約すれば以下のような内容である。

時代は明治の中期で、キリスト教を「耶蘇」と言って忌み嫌われていた時代である。主人公の長野信夫は、東京の本郷で生を受ける。小学生時代まで、父方の祖母と父の 3 人で暮らしていた。その暮らしの中で、信夫は祖母のトセから「お前の母はお前を産んで 2 時間で死んだ」と聞かされて育つ。しかし、祖母の死後、死んだと聞かされていた母が、突然自分の前に現れる。そこで彼は、母がキリスト信者であったことを理由に、彼の出生時、祖母が母を長野家から追い出したことが分かり、ショックを受ける。祖母の死後、信夫は両親と彼の知らない間に生まれた妹と暮らす。どうしてもキリスト信者である母になじむことができずにもんもんとしながら、キリスト教への入信はありえないことを公言する。小学校時代の親友との別れ、性への目覚めを経験し、20 歳を過ぎて小学校時代に分かれた親友と再会する。そこで、親友の妹に恋をするが、肺病とカリエスで寝たきりの状態であ

ることが分かり、親友の住む北海道に引っ越し、一人暮らしをする。しばらくして、あれほど嫌がっていたキリスト教に入信し、キリスト教青年会などで活躍する。親友の妹の結婚が決まったその日、塩狩峠で鉄道事故が起こり、鉄道職員として乗務していた信夫は、線路に飛び込み、殉職した。

この小説でもっとも共感したのが、事項で詳述するように、小学生時代まで祖母と暮らしていたこと、その暮らしの中での男性性の刷り込み体験、そして、あれほど嫌がっていたキリスト教への入信を前に、聖書の言葉との激しい葛藤の場面である。

## 2 男の子が女の先生を思うのは「恥」ではないのか

前項で要約したように、主人公の信夫の出生時、祖母は、彼の母親をキリスト教信者であることを理由に、長野家から追い出した。彼は小学生時代まで、祖母と父の 3 人暮らしの環境の中で育つ。

秋も終わりの日曜日、信夫は父に小学校 1 年生のときに担任だった根本芳子先生が退職し、お嫁に行ってしまうことを、つまらなそうに話していた。そこに、縫い物をしていた祖母が、「それはおめでたい話じゃありませんか」と言って、2 人の話に割り込んだ。根本先生が好きだった彼は、祖母の言葉に「おめでたくなんかない」と反発した。その様子に、祖母は彼のそのような口調を戒めながら、他の学年の先生が退職することと、彼とは何の関係があるのかとたしなめる。そして、「そんな女の先生のことなど、男の子は考えるものではありませんよ」という祖母の言葉が、彼をなんとなく不快にさせ、(なんで女の先生のことを男の子が考えたら悪いんだろう) という疑問を持たせる。

そんな彼の様子に、「お母様、先生を慕うことはよいことではありませんか」と助け舟を出したのは父だった。母親のいない彼が女の先生を慕う哀れさ、祖母では母親の代わりにはならないという父の思いがその言葉にこめられている。にも関わらず、祖母は父の言葉に、「男の子が女の先生を思うなんて、女々しい恥ずかしいことですよ」と一蹴する(三浦, 1972 pp22-24)。

私の祖母も、この作品に登場する主人公の祖母とまったく同じ考えの人であり、私自身も小学校の 3 年生くらいまで、信夫と同じような環境で育った。だから、この場面は人事とは思えないほどの共通点が多かった。

しかし、彼との相違点は次のようなことである。たとえば私は、祖母から「女やったらくよくよ考えるもんやない、まして好きになった男の子のことなんて」というフレーズの「女やったら、、、」というフレーズを、「男やったら、、、」とわざわざ代入した上で、女性性の高い男性に対する恋愛感情を口に出すことを禁じていた。また、この作品に登場する彼とは異なり、父との関係性も決してよいとはいえなかったもので、たとえ誰かを好きになっ

ても、それを誰にも言うことはなかった。そのような積み重ねが、誰かを好きになることを「恥」とし、まして、男の子が女の子のことを思うことを「女々しい」という心性を構築したといえるだろう。それに加えて私の場合、FTM トランスジェンダーという事情から、当時の自己の女性への身体変容を否定すべく、更に女性を異質な存在とみなした上で、女性を好きになる心性を初めから持ち合わせていなかったことが、ますます女性に対する恋愛感情を「女々しいもの」として意味づけていったことも事実である。

したがって私は、この場面では、祖母の信夫に対する厳しいまでの接し方を擁護し、信夫に対しては、男の子であることを理由に、恋愛感情を淫らに口にするものではない、という厳しい見解を示していた。

### 3 聖書の言葉から浮かび上がってきた自己の暴力性

次に、信夫が小学校時代に分かれた親友と再会し、その親友の妹に恋をするが、肺病とカリエスで寝たきりの状態であることを知り、東京から親友の住む北海道に引っ越し、一人暮らしをしていたときの場面である。

23 歳を過ぎたある日、信夫が北海道の一人住まいの借家で、妹の夫から送られた聖書を手にとって読んでいた。つまらないと思っていた聖書の中に、次のような成句が信夫の目を釘付けにした。「悪しきものに抵向かうな。人、もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ。汝を訴えて、下着を取らんとするものには、上着をも取らせよ」この成句に、彼は、子どもころに教えられた祖母のトセからの言葉を重ね合わせる。「信夫。男の子というものは、一つ殴られたら二つ殴り返すものですよ。三つ殴られたら六つ殴ってやるのです。それでは男とはいえません」って。彼は、この 2 つの言葉の間でシミュレーションしながら、「果たしてどちらの自分になりたいか」と自問自答している場面である（三浦、1972 pp296-297）。

聖書の言葉の口語訳は以下である。

悪いものに手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つようなものには、左の頬も向けなさい。あなたを告訴して、下着を取ろうとするものには、上着もやりなさい。（新約聖書、マタイの福音書、5 章 39-40 節）

この場面で私は初めて「主体的な録音図書の『男読み』」を実践した。つまり、信夫の自問自答している場面は、そのまま私の自問自答にも繋がり、「殴られることより、殴り返さないことの方が『男らしい』のか」という共通した自問自答をしていたことに気づかされた。

ここで、父との関係性が浮かび上がってくる。当時の私は、父から殴られると、自らも

殴り返していた。また、父から物を投げられたりすると、自らも父に食事を投げて応戦していた。つまり、「目には目を、歯には歯を」というように、やられたらやり返すことが、「男らしい」と信じて疑わなかった。そこには、「お父さん、なんで私を殴るのか」などの言葉は不要、といわんばかりに、殴りあったり、物を投げつけあったりしている最中は、言葉をさしはさむ予知は与えられていなかった。たとえ、言葉があったとしても、それは互いに攻撃し合う手段としての言葉でしかなかった。つまり、「男は、ものの「言い方」ではなく、「言った内容」ですべてが決まる」という荒っぽさだけが際立っていた。

このような父との関係性から、聖書を否定し、主人公の祖母の教えに同意した。すなわち、「男だったらやられたらやり返すのが当然」という、当に、仕返しが可能かどうかで男性性の有無が決まるというごく単純な根拠に基づいた結論を出したことで、自己の暴力性が浮かび上がってきた。(確かに聖書は正しいことを言っているだろう。しかし現実には、そんな綺麗事ではすまない。「殴られること」より、「殴り返さないこと」の方が「男らしい」という一面はあるのかもしれないが、少なくとも、FTM トランスジェンダーの私に、そんな悠長な考え方は通用しないだろう)

#### 4 終わりに

現在でも時々、『塩狩峠』を再読することがある。本稿では言及しなかった部分で、自己の男性性や暴力性に関して考えさせられる場面は多々ある。しかし、前項で詳述した聖書という言葉から浮かび上がってきた自己の暴力性に関しては、現在でも大きな課題となっている。

次回は、「点字」という文字情報を性格に読むことを通して、これまでの読書方法の変更を迫られ、新たな実線の間へと移行していく内容である。

牛若孝治 (立命館大学大学院先端総合学術研究科後期博士課程)